

教育者の偉大さ

第 11 期 立松 宗磨

小野ゼミでの生活は、後述することを除いては、もちろん山あり谷ありであったが、良い結果を残してきたと言えるだろう。まず、基礎文献レポートや SAS レポートでは唯一？ 再レポートを課されることなく、さらに最多の最優秀レポートを頂いた。次に、三田論では序盤、いや終盤付近まで大変もたついていたが、そこから大逆転を果たし、商学会賞受賞と関マケ論文賞受賞という結果を残した。4 年には、夏ケースの解題メンバーとなり、テーマ案をひねり出し、無事完成にこぎつけた。そう、活動主体が自分というフィールドでは、私は小野ゼミにおいて辛いと感じることはほとんどなかった。むしろ、ある活動が終わるたびに感じることでできる充実感に満足していた。

しかし、活動主体が自分以外というフィールドでは、小野ゼミにおいて困難ばかりであった。なぜなら、私は、自分のできることが人はなぜ理解できないのか、なぜできないのかがわからないからである。これを読んだ方は、「こいつ、嫌な奴だな」と感じるであろう。まあ、私が嫌な奴であることは自分でも重々承知しているが。このような考えから、私は人に教えるということを 20 年強避けてきた。そのため、妹と弟がいるのにも関わらず、彼らの勉強の面倒を見た記憶は 1 度もない。もちろん、塾講師や家庭教師は絶対にやらないと心に誓っていた。そんな私は、これまではこのことを悩みと捉えることもなく、むしろ自分の個性と割り切って生活することができていた。しかし、4 年生として小野ゼミで過ごしたこの 1 年で、この考えは大きな悩みとなった。うまく教えることができない、できるようになるまで根気強く見ることができない（私がイライラしてしまうため）、なぜできないのかが理解できない。後輩の面倒をよく見ている同期を見ると、純粋にすごいという気持ちが湧いた。今年度は、今まで知らなかった、同期の良いところを見つけることができた。

さて、先述した経験から私は、同期以上に大学院生、そしてなにより先生の教育者としての偉大さを思い知ったのであった。もちろん、このことは去年指導を受けていた身として感じる部分もあったが、それ以上に、教えることが苦手な自分が教えることを必要とされる立場となった今年に、より感じたのであった。自身の高度な研究を進めて実績を残す一方、未熟な後輩を親身に、根気強く指導して、1 人前に育てていく。この両面をハイレベルでこなす大学院生と先生のすごさたるや、自分とは比べ物にもならないことは明らかであった。そんな教育者の偉大さを、身を持って感じさせてくれ、また、組織における教育の重要性を感じさせてくれた小野ゼミという環境に感謝するとともに、将来自分も教育者ではないものの、小野ゼミでの経験（失敗）から多くを学び、成長し、偉大な上司になりたい、いや、ならなければならないと感じた。それこそが、小野ゼミで得た経験を活かす、自分にとっての最良の道なのではないだろうか。